



標記プログラムは、日本とレバノン共和国の間の情報交換・友好関係促進を目的として、ハリリー首相訪日時の森総理（2001年当時）の提案が発端となって始まった政府間文化協力事業の一つである。様々な分野の若手専門家10名からなる訪問団が互いに相手国から招かれ、約10日間の日程で交流プログラムが提供される。これまでにレバノンからの訪日は2回、日本からのレバノン訪問は2002年5月に第1回目を実現している。

筆者はこの度、第2回目の訪問団に農業経済学研究者として参加した。期間は6月20～30日、他の参加者は鹿島建設、日本貿易振興機構（JETRO）、国際協力機構（JICA）、国際交流基金、中東調査会、日産自動車、文化放送、読売新聞および東京放送から各1名である。レバノン側が組んだ緻密なスケジュールにより、ラフード大統領およびハリリー首相の表敬訪問を始め、政府観光局や開発局、国立農業試験場、政党本部、職業訓練所、新聞社、孤児院、露天市場、各地の名所旧跡などを視察して全土を縦横に巡り、行く先々で専門家同士の意見交換の場が設けられた。

レバノンとその首都ベイルートと聞くと、多くの人がまずテロや戦争などの危険なイメージを思い浮かべるのではないだろうか。レバノンは、1975年から約15年間にわたって、パレスチナ問題に端を発する悲惨な戦争を経験した。ベイルートだけでなくレバノン各地で起こった破壊と殺戮の戦禍によって、それまで中東随一であった金融・貿易センターとしての経済的地位も、美しい観光リゾートとしての評判も、すっかり地に落ちてしまったのである。そして、戦争終結後は世界のメディアの関心も遠ざかった。レバノンの現状に

ついて日本で得られる情報は非常に少なく、かつての物騒なイメージだけが取り残されてしまったようである。

しかし、戦後の復興努力は、特にインフラやハード面で急速に成果をあげてきた。それは日本の戦後復興にも比肩されるめざましい勢いだと聞く。数年ぶりに入国した人はその回復ぶりに誰しも驚嘆するらしいが、我々訪問団も、事前のイメージが暗かっただけに驚き、ホッとした。ベイルートは今なお建設ラッシュで随所に工事現場や更地も見られたが、主要な街並みの復元は広い範囲でほぼ完了していた。「中東のパリ」と呼ばれた往時の活気もかなり取り戻しているようだった。

このほかにも、我々のイメージをたびたび覆してくれるのがレバノンであった。中でも特記したいのは、抜群な治安の良さについてである。強盗・殺人等の一般犯罪に関して言えば、ベイルートの繁華街でもほとんど心配がない。これは現地で旅や生活をした経験がある日本人には共通した評価のようだ。夜更けの外出もそれほど物騒な話ではない。そもそも夕食時間が大変遅い習慣のため、ナイトクラブのみならずカフェテラスなども随分遅くまで開いていて、気軽に楽しめるのだ（ちなみにレバノンでは飲酒の制約はほとんどない）。アメリカやヨーロッパ主要都市に関する渡航情報（危険情報）が「ノーコメント」であるのに、よほど秩序性の高いベイルートに関して微に入り細に入った防犯の心得が書かれてあるのはバランスが悪いのではないか。現地を歩いてみれば誰もがそう思うに違いない。

ただ、イスラエルと接する南部国境周辺や難民キャンプはまだ恒常的な緊張状態にあるし、中東情勢と軌を一にするレバノンの将来は昨今いっそう不透明であると付言せざるを得ないのは、非常に残念なことである。

しかし繰り返すが、レバノンは誰でも気軽に訪れることができる国だ。中東で最も古い貿易都市ならではの素晴らしい文化遺産や、イスラム教とキリスト教の共存の姿などは、非常にユニークで興味深い。また、レバノン人の気質はフレンドリーで礼儀正しく、居心地がよいと感じるだろう。筆者も是非また訪れたいと思っている。